

解釈学的現象学の成立

本田 弘 治*

Die Entstehung der hermeneutischen Phänomenologie

Koji HONDA

要 旨

解釈学的現象学は、我々に与えられている認識能力に基づいて、現象（自然現象であれ、社会現象であれ）を、現象それ自身が示している通りの意味として了解し、それを解釈（表現）するという、あらゆる学のための研究方法 — つまり哲学 — です。

解釈学的現象学が、このような「あらゆる学のための研究方法」であるためには、それは絶対確実なものでなければなりません。その為には、次の事柄が明確にされねばなりません。

1. 我々に与えられている認識能力、つまり、意味の世界に開かれ、意味を理解することが出来る可能性を明確にすること。
2. 我々によって了解されるものは、我々の了解可能性の範囲を、超え出ることのないものであるが、それはどの様なものであるか、を明確にすること。

本論の課題は、以上のことの研究であります。

(1)

解釈学的現象学は絶対確実な了解を求める研究方法です。それでは絶対確実なものは存在するのでしょうか。一般に絶対確実なものなどないだろうと思われています。しかし、そうではありません。唯一、絶対確実であると言わざるを得ないものを示したのがデカルトです。

デカルトは絶対確実なものを求めて、疑わしいものを全て捨て去りました。人間の感覚にも錯覚がありますし、理解にも誤解が入り込む危険はさげられません。最後にどうしても捨て去ることが出来ないものが残りました。「私はこのように疑い、このように考えている」という「考えている私の存在」は、否定できない絶対確実なものとと言わざるを得ないということにデカルトは気付いたのです。有名なデカルトの「コギト」と言われているものです。

「私は気づいた、私がこのように、すべては偽である、と考えようとしている間も、そう考えている私は、必然的に何ものかであればならぬ、と。」¹⁾

こうしてデカルトは、絶対確実な「考えている私の存在」(Sum cogitans) という、他の何の

平成24年9月21日受理 *教養部非常勤講師

保証も必要としない・私自身が私の存在を直接観取（直観）している・「必然的に何ものかでないならばならぬ存在」を見出しました。

ところが彼は、続く文章で

「『私は考える、ゆえに私はある』（Je pense, donc je suis. Cogito ergo sum.）というこの真理は・・・哲学の第一原理として、受け入れることができる、と判断した。」²⁾

と述べています。

つまりデカルトは、「考えている私の存在」という、必然的に認めざるをえない存在を、「私は考える」と「私はある」という二つの命題に分解し、それを、同一律で結びつけることにより、近代的「主観」概念にしてしまいました。「考えている私の存在」という、存在それ自身の有り方（現象）を表現している記述を、判断にもとづく命題に、そしてさらに命題と命題を、同一律で結びつける論述にしてしまったのです。

このことを、デカルトのもう一つの研究課題の、数学の言葉で言い換えれば、「必然的に認めざるを得ない」という公理・直観的に納得せざるを得ない公理を、「私は考える」と「私はある」という、判断にもとづく二つの命題で規定された、定理にしてしまったのです。そして定理は証明されなければ、仮定でしかありません。

さらに彼は

「私は一つの実体であって、その本質あるいは本性はただ、考えるということ以外の何ものでもなく、存在するためになんらの場所も要せず、いかなる物質的なものにも依存しない」³⁾

物質や場所と関係しない「実体」であると考えました。

つまり「私」は「この場所に存在している物質・私の身体」とは区別された「私という実体」であると考えたのです。

デカルトはまた、

「『われわれがきわめて明晰に判明に理解するところのものは、すべて真である』ということとを、一般的規則としてみとめてよいと考えた」⁴⁾

と、「絶対確実な実体としての存在」である我々が理解しているものを、「我々の確実さ」から推論して、真とみとめました。このようにして、近代的「客観」概念が規定されることになりました。

デカルトによって見出された、「絶対確実な、考えている私の存在」と、確実であると推論された「考えられている対象」とが、「主観」「客観」として規定され、自分の身体をも含めて世界全体が「客観」となってしまいました。「主観」「客観」という、現代でも常識として受け入れられている概念が成立したのです。そうすると、「客観」である身体から切り離された「主観」は、世界の内には存在しないことになり、世界を越え出た存在、超越論的実体としての「主観」となりました。その結果、どの様に「主観」と「客観」が関係するのかを説明するのが困難となりました。

(2)

この困難を、解決に一歩進めたのが現象学哲学者のフッサールでした。

フッサールは、デカルトが気づいた「考えている私の存在」の絶対確実性を、否定できないものと認めました。しかし「考える」ということは、同時に、「何かについて考え、何かを認識している」のであり、「私はこれをこの様に認識し、それをその様に認識している」ということになります。「何もないものについて考える・何もないものを認識する」ということは出来ないのです。「考えるという働き」は、「考えられる事柄」なしには成立しないのです。

デカルトが「この様に考えている私は、必然的に何かのかでなければならぬ」と、「考えているわたしの存在」を、否定できないものであるということに気付いたと同様に、「私が、それを、その様なものとして認識している」という「ある事柄について私が考えている」という事実は、コギトと同様、直接観取している、否定できない絶対確実なものと言わねばならない、ということにフッサールは気づいたのです。

「ある事柄を、その様なものとして認識している」、その「ある事柄」が、たとえ確実な存在・実体ではなく単なる現象にすぎないとしても、「私がそれを、その様に認識している」ということが、絶対確実であることには変わりありません。⁵⁾

現象にすぎないとしても、いや、我々は現象を認識することしか出来ないのであって、「実体」とか「物自体」或いは「絶対的存在」などは、我々の認識能力とは無縁のものでしかありません。我々に可能なことは、現象を認識することであり、現象こそ、我々が絶対確実に認識しているものである、ということになります。

我々は事象（現象）それ自身を認識しているのですが、フッサールは、デカルトが規定した「主観」「客観」概念に基づいて「主観」が「純粹意識」の内に対象「客観」を構成する、という仕方でも事象（現象）を認識していると考えました。

デカルトでは「考えている私の存在」が絶対確実であったのですが、フッサールになると「事象をその様な事象として認識している」ということが、確実となったのです。しかし、「主観」と「客観」がどの様にして係わり合っているのか、という問題点は残ってしまいました。

デカルトもフッサールも、この「主観」「客観」という対立した概念が、いかに結びつくのかを説明するのに苦慮しております。

デカルトはそこで、キリスト教の神に、助けを求めます。「絶対的実体である神」が創造した、考える「実体」としての私の精神「主観」と、私の身体を含めた対象としての世界「客観」とを次のように考えます。

「客観」とは、

「神が自然の中にしっかりと定めている法則」つまり、自然界の現象も、私を含めた動物の身体の運動も、全て神によって定められている法則に従っているという「客観」であり、

「主観」とは、
法則についての「その観念を我々の精神の中にしっかりと刻みつけている」、神によって定められた法則に従って考えている「主観」であると。

つまり「主観」と「客観」とは、「法則に厳格に守られている」のであり、神に媒介された関係であると主張します。⁶⁾

フッサールは、意識「主観」と意識の対象「客観」の関係を説明するために、様々な概念を作り続けます。彼の現象学を研究するとき、彼が使用する用語（概念）が移り変ってゆくため、その概念が表現しようとする現象を、把握することは出来なくなり、フッサールの現象学全体を、納得できる形でとらえることは、困難なものとなってしまいました。

(3)

「主観」「客観」という、この難点を克服したのがハイデガーでした。

ハイデガーは、認識している私の存在を、「現に・今・ここに・この様に存在している存在者（現存在Dasein）」と表現しています。人間とか「主観」とかという、伝統的に哲学で使用されている、概念や先入観を一切排除して、「現象それ自身を、その様なものとして了解している我々の存在」を、我々の存在それ自身が示している通りに、「現存在」と表現したのです。

現存在とは、現に・今・ここに・この様に・存在している「あなた」であり、また「私」であるのです。

この我々の現存在は、我々が気づいた時には、既にこの世界の内に、存在させられてしまっているものであり、世界の内に、投げ出されてしまっているのです。

しかも現存在は、ただ存在しているだけの物体のようなものではありません。現存在は自分自身であると同時に、自分自身でないものへと、係わっています。つまり実存（外存Existenz）しているといわねばなりません。このような現存在の有り方を、ハイデガーは「自分自身であると同時に、自分自身でないものへと開かれてしまっている存在」と表現しています。

現存在の存在の仕方を「開け」と表現することは、我々に与えられている認識能力を越え出て、何事かを主張しているではありません。現存在の存在の仕方を、そこに存在している通りに受け取り、表現したものです。

それでは「開け」とは何を表現しているのでしょうか。

我々は、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚という五感を通じて、外界へと開かれています。これらの感覚は、それぞれの五感に対応する現象を、外界から受け取っています。それもただ、見えているもの、聞こえている音というだけでなく、快い色、嫌いな声、美味しそうな匂い、等として、快・不快を伴いながら、開けを通じて受け入れているのであり、それぞれの変化や運動を含めて、受け入れ記憶しております。

しかし我々は、それだけではなく、五感を通じて「意味の世界」へも開かれています。

「意味の世界」に開かれるとは、どの様なことでしょうか。このことを明示してくれたのが、ヘレン・ケラーの証言と、ヘレンの家庭教師サリバン女史の報告です。

ヘレン・ケラーは一才の時、熱病によって視覚と聴覚を奪われました。ケラー一家の人脈を通じて、当時の可能な限りの治療にも拘わらず、彼女は回復することはありませんでした。

ヘレンが七才になる三ヶ月前に、彼女のもとに家庭教師のサリバン女史がやって来ます。

視覚と聴覚を奪われたヘレンとの、意思の疎通を求めたサリバンは、それを、触覚を通じて行おうとしました。ヘレンの手の平に、指文字を書くことを、サリバンは始めました。しかしヘレンは、文字（言葉）が存在するのを知りません。それゆえサリバンが書く文字は、ヘレンにとって、単なる手の平へのコチョコチョ遊びの一種でしかなかったのです。

しかしヘレンは、サリバンによって毎日根気よく為される、手の平への接触によって、そこに何種類かのパターンが存在することは知っており、それらのパターンを記憶していました。ヘレンが人形を抱いて、母親の手の平に一定のパターンを書くと、母親が喜ぶことも、知っていました。しかしそれが、人形を表現する文字（言葉）であることには、気づいていませんでした。

ある日ヘレンは、サリバンによって為される、手の平への繰り返しての接触に対するフラストレーションから、ヒステリーをおこし、人形を投げつけ壊してしまいます。

「私は繰り返しての試みに癩癩を起こして、新しいお人形を手にとるなり、床にたたきつけました。そして私は、砕けたお人形の破片を足先に感じながら、痛快に思ったのです。」⁷⁾

サリバンは、そのヘレンを庭へつれ出し、しばらく散歩をします。のどが渇いたヘレンに、マグカップを持たせ、井戸のポンプで水を汲んでいたとき、ヘレンの手に水があふれました。その時サリバンは、ヘレンのもう片方の手の平に「水」と指文字を書き、その手の平のパターンが、手に溢れた水であることを示しました。この時ヘレンは、物を表現することが出来る、文字（言葉）の存在に気づいたのです。

その時の様子を、サリバンは1887年4月5日付の手紙に、次のように書いています。

「井戸小屋に行って、私が水をくみあげている間、ヘレンには水の出口の下にコップをもたせておきました。冷たい水がほとぼしって、湯飲みを満たしたとき、ヘレンの自由な方の手に“w-a-t-e-r”と綴りました。その単語がたまたま彼女の手勢によくかかる冷たい水の感覚にとってもびったりしたことが、彼女をびっくりさせたようでした。彼女はコップを落とし、くぎづけされた人のように立ちすくみました。

ある新しい明るい表情が顔に浮かびました。彼女は何度も“water”と綴りました。それから、地面にしゃがみこみその名前をたずね、ポンプやぶどう棚を指さし、そして突然ふり返って私の名前をたずねたのです。私は“teacher”と綴りました。」⁸⁾

ヘレンがこの時気づいたのは、「waterという文字が、水を示している」ということではありません。

ヘレンが気づいたのは「手の平に書かれたパターンが、手の甲を流れるものを示している」と

いうことです。

文字の存在を知らないヘレンにとって、手の平に書かれたパターンは、コチョコチョコ遊びの、一つのパターンでしかなかったのです。しかし「手の平に書かれたパターンが、手の甲を流れるものを示している」ということに気づいた時、ヘレンは「パターンがものを示す」、つまりパターンは、ものを示すことが出来るもの、文字（言葉）であるということに気づいたのです。

「文字（言葉）を認識する」というと、「概念」というものを考えてしまいがちですが、ヘレンが気付いたのは「概念」とは関係ありません。そもそも、意味の世界に開かれていなかったヘレンに、概念など形成されているわけがありません。

こうしてヘレンは、触覚という感覚を通じて、「意味の世界」へ開かれたのです。そのパターンが、意味を表現することが出来る文字（言葉）であることを知ったヘレンは、部屋に帰るまでに、周辺にある物をサリバンの問いつづけました。

その時のことをヘレンは「こうして物にはみな名のあることがわかったのです」⁹⁾と証言しています。しかしサリバンは、それについて、ヘレンが物の名だけではなく、「open, shut, give, go, come その他多く」の動詞も了解したと、報告しています。¹⁰⁾

「意味の世界」に開かれたヘレンは、自分の行為の意味にも気づきました。自分が投げて壊した人形 (doll) が、今は、人形 (doll) ではなくなってしまったということ、そしてそれを自分がしてしまったことに気づきました。

「部屋にはいると、すぐに私は自分が壊したお人形のことを思い出して、暖炉の片隅にさぐり寄って破片を拾いあげ、それをつぎ合わせようと試みましたが、だめでした。私の目には涙がいっぱいたまっていました。自分のしたことがわかったので、私は生まれて初めて、後悔と悲哀とに胸を刺されました。」¹¹⁾

(4)

健常者は、言葉を知らない出生時から、既に「意味の世界」に開かれています。目が見えるようになった新生児に話しかけると、目を合わせてきて、にっこりとし、声を発してきます。気分が悪いときや不満がある時も、楽しくて気持ちが良いときも、それが相手に伝わるように、泣いたり声を発したりしてきます。「見られ、そして、見る」と同時に「話しかけられ、そして、話しかける」という「意味の世界」に開かれているのです。

しかし、たとえ健常者であっても、出生時から他者との交流が絶たれた場合、「意味の世界」に開かれることはありません。神聖ローマ帝国のフリードリッヒ II (1194~1250) の話として伝えられているものがあります。

フリードリッヒ II は『人が最初に使用する言葉とは、どの様なものであるのか』を知るために、新生児を集め、世話をする者たちに、新生児に言葉をかけることを禁じて育てさせたが、一

人も言葉を発することはなかった」と伝えられております。それと同じようなことが、現在でも発生しています。

一人の父親によって、母親とその二人の子供たちが、他者から断絶されたのです。精神に異常をきたした母親は、三年程して実家に引き取られました。子供たちはそれ以後も、父親と住んでいましたが、家の外には出してもらえず、他者との接触は絶たれていました。兄が七才頃、兄弟は保護され、別々の家庭に預けられましたが、発達異常でした。このように、他者との関係を絶たれた異常な環境のもとでは、「意味の世界」へ開かれることは困難なのです。

我々は、感覚を通じて外界へ開かれ、その都度の現象を受け取り、記憶しています。丁度ヘレンが、手の平へのコチョコチョ遊びでのパターンを記憶し、そのパターンによって、母親が喜ぶことを記憶していたように。

しかし「感覚されたものの記憶」と「感覚されたものの意味を理解すること」とは、全く別のことなのです。そして、我々は感覚されたものの意味を理解しているのであり、単に記憶しているだけではないのです。つまり、我々は「意味の世界」へ開かれている現存在であるのです。「意味の世界」へ開かれるためには、「見られ、そして、見る」「話しかけられ、そして、話しかける」相手（他の現存在）が存在しなければならないのです。

現存在は、ただ自分だけで存在しているのではなく、他者（他の現存在）との間によってこそ開かれる「私の現存在」と「他の現存在」との共・現存在として、「意味の世界」で生存しているのです。「意味の世界」へ開かれることが出来る能力を、我々は与えられているのです。

ヘレン・ケラーにおいては、感覚されたものに対する、快・不快（良い香り・悪臭、美味しい・不味い、快い肌触り・不快な感触）等を伴っての「記憶の世界」から、あらゆるものを意味として把握し、自分の行為をも意味として把握することが出来る、「意味の世界」に開かれたのです。

「主観」と「客観」と考えられていたものは、共・現存在として、「意味の世界」で生存している、我々の存在の仕方を、抽象化し、規定したものでしかなかったのです。我々は、相手や対象なしに、「主観的」に考えたり、我々自身を離れて、「客観的」に考えたりしているのではなく、我々に示されている様々な現象を、感覚を通じて示される意味として受け取っているのです。

デカルトも「意味の世界」に開かれていたからこそ、「すべては偽である、と考えよう」とすることが出来たのです。

「私は、私が身体を持たず、世界というものも存在せず、私のいる場所というものもない、と仮想することはできるが、しかし、だからといって、私が存在せぬとは仮想することができない」¹²⁾

と、私の存在を、他のなにものにも依存しない存在・実体であると考えていますが、そうすることが出来たのも、既に、他者との交流によって、共・現存在として「意味の世界」に、開かれていたからこそ出来たのです。

デカルトやフッサールにおいて、「主観」「客観」という対立した概念で考えられていたものを、ハイデガーは、世界の内へ投げ出されてしまっている現存在が、その開けを通じて他の現存在と係わりながら「意味の世界」のもとで現象の意味を了解している、その現存在の存在の仕方であるということを、明らかに示したのです。

現存在は、その有限性のもとで（五感という、与えられている能力のもとで）、共・現存在という存在の仕方にもとづく「意味の世界」で存在している存在者なのです。

(5)

解釈学的現象学は、我々に開かれている「意味の世界」のもとで、対象としている現象の意味を、自然現象であれ、社会現象であれ、示されている通りに読み取り解釈するというものです。まさしく、現存在に与えられている能力に基づく、厳密な学の研究方法です。

それゆえ、解釈学的現象学においては、現象それ自身の意味を、示されている通りに読み取るために必要な態度が求められます。それは、示されている現象について「勝手に判断をしない」という態度です。これが「判断中止（エポケー）」といわれているものです。

判断するということは、対象として示されている事柄（直観された現象）を、別の事柄（概念）によって表現するということです。しかしその概念は、示されている現象それ自身の、本来の存在の仕方を覆い隠し、現象それ自身の意味が、他の同類と考えられた事柄との関係のうちで、一般化され抽象化されてしまっているものです。即ち、判断するということは、現象それ自身を示すものの代わりに、一般化され抽象化されたものによって表現している、ということになります。

解釈学的現象学で使われる言葉は、それゆえ、対象としている現象それ自身を表現しているものであらねばならず、先入観や、出来合い（既成）の概念に、つまり「言葉の歴史」に影響されてはだめなのです。

例えば、「教育」という現象を問題とする場合、「教育とは何か？」と、教育という言葉「概念」が、「どの様な現象を、表現しているのか」という方向へと、問い進むのです。この、「何々とは何か？」と問う問い方は、概念を現象へと還元する、現象学的還元という働きをしています。この様に、「教育」という概念が示している現象それ自身を問うことは、「教育」について論じている、だれかの主張等を、研究するものではありません。

現象それ自身が示しているものを、読み取り研究するとき、またもちろん、その研究に自分の意見や主張等を入れてはなりません。自分の意見や主張が、現象に含まれているはずがありません。現象自身を了解し、了解したことを解釈（表現）するのです。

本論においても、「絶対確実な了解とはなにか」を求めているのであり、デカルトやフッサールの主張における、「絶対確実な了解」についての、彼らの考え方を研究しているではありません。

デカルトやフッサールの主張の中で、「絶対確実な了解」という現象を表現している所、そうであると納得できる所、認めることが出来る所を認め、それを認めた上で、「では、その様な、絶対確実な了解とは何か？」と問うのが、解釈学的現象学という研究方法なのです。

直観された現象それ自身が示している意味を、読み取り表現する、つまり示されている事柄を、示されている通りに、その様なものとして記述するときには、判断が中止されており、絶対確実であることに変わりないことになります。

(6)

ハイデガーは、自分自身で見出した、「解釈学的現象学」というこの方法で、主著『存在と時間』をはじめとして、多くの事柄（現象）を研究しております。

『存在と時間』において、彼が研究しなかったのは、もちろん「存在」と「時間」についてです。しかし、彼の主著は、前半部だけが出来上がり、後半部は執筆されなかったのです。前半部でハイデガーは、「存在」と「時間」を問うために、そもそも問いを立て、問いを問うことが出来る存在者「現に・今・ここで・この様に問うている自分自身の存在である」現存在を研究しました。

現存在という「意味の世界への開けを持つ存在者」を、ハイデガーは、解釈学的現象学の方法で研究したわけです。「現存在とはいかなる存在であるのか」と、その存在の仕方を問うたのです。

「現存在の存在の仕方」を問うのは、伝統的には「存在論」と言われてきました。しかし解釈学的現象学とは、現象それ自身が示している通りの意味を表現しようとするものであり、伝統的な名称で表現すると「存在論的認識論」となるのかもしれませんが。しかしそれは、まるで「丸い四角」といっている様なもので、やはり解釈学的現象学は解釈学的現象学である、というほかないのです。

前半部だけで、ハイデガーは現存在という現象を見事に表現し、世界的な哲学者になりました。後半部で彼が研究しなかったもの、つまり主題である「存在と時間」は書かれることがなかったのです。それでは、「存在」あるいは「時間」は、解釈学的現象学でいう、現象なのでしょうか。

解釈学的現象学という方法で研究している時、直観された事柄を表現へもたらすのは、もちろん簡単なものではありません。研究している事柄が、何を示しているのかということに、すぐに気付く時はまれで、気付くまで、じっとその事柄を、直観しつづけなければならないことの方が多いのです。また気付いたときでも、表現してみると、なにかしっくりこない（bestimmenしない）ときもあり、或いは、先入観にもとづいた（エポケーされていない）ものであったりすることも、あります。その様なときには、さらにその現象が示している意味を、明確に表現できるように、直観し続けねばなりません。

ハイデガーはこのことを「思惟に耐えねばならない」と表現しています。

注

- 1) デカルト『方法序説』野田又夫訳・筑摩世界文学大系 19 p18.
- 2) 同書 p18.
- 3) 同書 p19.
- 4) 同書 p19.
- 5) Edmund Husserl “Ideen der Phänomenologie” Husseriana. Band II vgl. S30
- 6) デカルト『方法序説』野田又夫訳・筑摩世界文学大系 19 p22,23.
- 7) ヘレン・ケラー『わたしの生涯』岩崎武夫訳 角川文庫 p30.
- 8) アン・サリバン『ヘレン・ケラーはどう教育されたか』榎 恭子訳 明治図書出版 p34,35.
- 9) ヘレン・ケラー『わたしの生涯』岩崎武夫訳 角川文庫 p31.
- 10) アン・サリバン『ヘレン・ケラーはどう教育されたか』榎 恭子訳 明治図書出版 p35.
- 11) ヘレン・ケラー『わたしの生涯』岩崎武夫訳 角川文庫 P31.
- 12) デカルト『方法序説』野田又夫訳・筑摩世界文学大系 19 p18,19

Zusammenfassung

Die hermeneutische Phänomenologie ist eine Untersuchungsmethode für alle Wissenschaften, mit anderem Wort sagen, die Philosophie.

Aufgrund der Erkenntnismöglichkeit, die uns gegeben ist, verstehen wir das Phänomen, ob ein Naturphänomen oder ein Sozialphänomen, als Sinn von Phänomen, und erklären wir den Sinn von Phänomen.

Die hermeneutische Phänomenologie fordert den absolut klar und gewiß verstandenen Sinn von Phänomen.